

千早原遺跡の有茎尖頭器

堤 隆

資源環境と人類 第10号 55-57頁 2020年3月

Natural Resource Environment and Humans

No. 10. pp. 55-57. March 2020.

千早原遺跡の有茎尖頭器

堤 隆[※]

要 旨

本論では、長野県下伊那郡高森町の千早原（ちはやっぱら）遺跡の縄文草創期の有茎尖頭器の資料報告を行った。本有茎尖頭器は、下呂石製とみられ、逆刺が横に突出するいわば短剣形の形態を呈し、東海地方などに散見されるタイプである。押圧剥離によるとみられる右肩上がりの発達した並列剥離を有し、北海道以西に一般的な製作の特徴を有する。

キーワード：有茎尖頭器、千早原遺跡、縄文草創期、並列剥離、右肩上がりの剥離

1 はじめに

ここに紹介する資料は、長野県下伊那郡高森町吉田地籍にあたる千早原（ちはやっぱら）遺跡の有茎尖頭器である。千早原遺跡は天竜川の右岸にあたり、本高森山の一部をなす吉田山が形成した扇状地上にある遺跡である。

石器は、2019年2月の発掘調査において検出され、出土地点の標高は685m、土坑または落ち込みとみられる場所から出土したが、遺構との関係性ははっきりせず、単独出土で共伴遺物はない。

筆者が科研費で進めている「神子柴系石器群の生成とその性格をめぐる研究」と関連する草創期遺物であるため、高森町教育委員会の許可を得てここに紹介するものである。

2 石器

本有茎尖頭器は、風化が進んでいるが、肉眼観察では下呂石を素材としているとみられる。いわゆる逆刺は下に伸びず、横方向に短く突出する。形態は全体にシンメ

トリーで、整った短剣形を呈している。断面はレンズ状である。最大長97.8、最大幅21.2mm、最大厚8.0mm、重さ13.1gを測る。

茎部は古く欠損する。先端には縦方向からのごく小さ

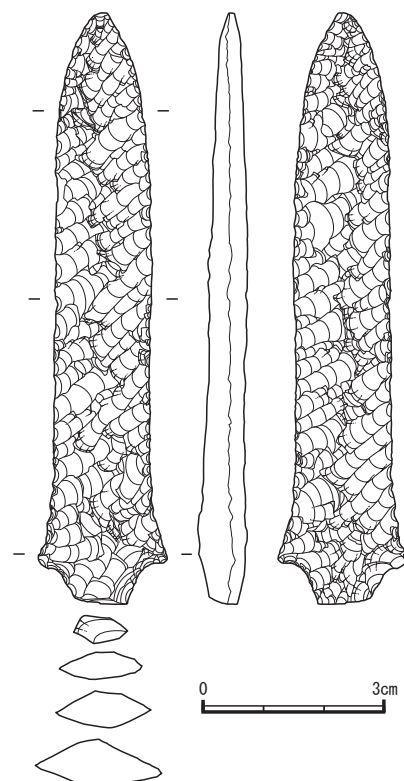


図1 千早原遺跡の有茎尖頭器 (4/5)

※ 明治大学黒耀石研究センター 〒386-0601 長野県小県郡長和町大門3670-8
責任著者：堤 隆 (tsutsumi@avis.ne.jp)

な剥離が確認されるが、偶発的なもので衝撃剥離痕とはいえないかもしれない。両面には、細長い斜めの剥離が並列し、一部の剥離は中央の稜を越えて反対側まで伸びるものがある。おそらく熟練した製作者による押圧剥離によるものであろう。

3 考察

有茎尖頭器は、木曾開田高原の柳又遺跡（小林1967）例を標識とする柳又型や、新潟県の小瀬が沢洞窟（中村1960）にみる小瀬が沢型などのタイプがよく知られ、議論の対象となっているが（栗島1984、白石2001）、本例は両タイプとは異なる。類似する形態は、愛知県二本木遺跡など（岩野ほか2002）、東海地方に散見されるものである。発達した斜めの並行剥離を持つ点においても、東海地方の有茎尖頭器と共通する。

日本列島の有茎尖頭器について長井謙治は、身体技法に由来する「石器扱い」という考え方のもと、北海道と、それ以西の本州・四国・九州でまったく「石器扱い」が異なることを明らかにしている（長井2009）。すなわち北海道では、「左肩上がり」の斜状並行剥離が見られるのに対し、本州以西では「右肩上がり」であることが大きな特徴であり、その剥離は、向って右の側縁では逆刺側から先端に向って進行するという。本資料も「右肩上がり」であり、向って右の側縁では、逆刺側から先端に

向って進行する点で長井の述べる特徴と一致する。石器の保持と手の動き、剥離具などの動作と絡み、本州以西的な動作、「石器扱い」によって製作された石器であることが特徴的である。

4 おわりに

本報告では、発達した斜めの並行剥離を持つ有茎尖頭器について述べた。報告にあたっては、高森町教育委員会高島佳奈氏にお世話になった。厚く御礼申し上げる次第である。

本研究は、科学研究費基盤研究(C)「神子系石器群とその生成をめぐる研究」研究代表者：堤 隆（課題番号17KO3216）の成果の一部である。

引用文献

- 岩野見司ほか 2002 「二本木遺跡」『愛知県史資料編 考古1』pp.231-234 愛知県
 小林達雄 1967 「長野県西筑摩郡開田村有舌尖頭器とその範型」『信濃』19-4 pp.25-32
 栗島義明 1984 「有茎尖頭器の型式変遷とその伝播」『駿台史学』62 pp.50-82
 長井謙治 2009 『石器づくりの実験考古学—実験考古学と縄文時代のはじまり—』248P 同成社
 中村孝三郎 1966 『小瀬が沢洞窟』120P 長岡市科学博物館
 白石浩之 2001 『石槍の研究』431P ミュゼ

（2020年1月8日受付／2020年1月28日受理）

A stemmed point from the Chihayappara site

Takashi Tsutsumi *

Abstract

This paper reports the stemmed point of the Incipient Jomon from the Chihayappara site, Takamori Town, Shimoina County, Nagano Prefecture. This stemmed point likely made of Geroishi (Yugamine rhyolite) is dagger-type, often distributed in the Tokai region. Flaking scars show regularly aligned pattern, probably made by pressure-flaking technique. The scar patterns on the right edge of the stemmed point suggest that this stemmed point was shaped by diagonally-oriented pressure flaking from the upper-right to lower-left. A habitus to make such scar pattern has little observed on the stemmed points of Hokkaido, but generally found from those of western Japan.

Key words : stemmed point, Chihayappara site, the Incipient Jomon, parallel scars, pressure flaking from the upper-right to lower-left

(Received 8th January 2020 / Accepted 28th January 2020)

* Center for Obsidian and Lithic Studies, Meiji University
Corresponding author : T. Tsutsumi (tsutsumi@avis.ne.jp)